

序

本書の初版は1995年に出版され、以来21年が経過した。骨粗鬆症が世界保健機関（WHO）により疾患として定義されたのが1994年、薬物治療で骨折発生率が低下することが初めて確認されたのは1996年である。当時は、ようやく専門家以外の方々の間でも、骨粗鬆症診療の必要性が認識され始めた時期であった。すでに骨粗鬆症関連の教科書はあったが、研修中の医師や一般診療に従事する医師の方々に役立つ「早わかり」的なものはあまり多くはなかった。そこで、基礎的な知識から最新の情報まで、日常診療に必要な知見を簡潔に提供するため、持ち運びに便利のようにポケット版として本書が発刊された。執筆は、臨床経験が豊富で関連分野にも精通した方々をお願いした。この方針は今回の改訂6版にいたるまで一貫している。

21世紀に入ってからの、骨粗鬆症に関する新たな知見の展開には目を見張るものがある。骨折の疫学データの集積により、骨粗鬆症における「骨折の連鎖」が定量的に明らかになり、日常診療における「骨粗鬆症による骨折」の判定が容易になった。骨の細胞生物学の進歩により骨粗鬆症の病態の多様性が明らかになり、加齢に伴う骨強度低下の病態は、性ホルモンの欠乏だけでなく、全身的諸臓器の細胞機能の変化に同調したエネルギー代謝全般の破綻という枠組みの中で捉えることが必要になってきた。また、骨の代謝調節における骨細胞の実質的な機能も明らかになりつつある。

既存の骨粗鬆症治療薬のエビデンスが集積されるとともに、新規治療薬の開発も成果を上げている。ビスホスホネート、選択的エストロゲン受容体モジュレーター、テリパラチドなどの効果と安全性については日常診療で確認されてきた。さらに、抗RANKL抗体デノスマブを含めて、抗スクレロスチン抗体製剤や副甲状腺ホルモン関連蛋白製剤など強力な骨密度増加効果のある

序

薬剤も登場しつつある。今や、栄養、運動などの生活習慣の改善とともに、治療薬の適切な使用により骨粗鬆症からの離脱を目指すことも可能になってきたといっても過言ではないであろう。

本書が前版と同様に、医師だけでなく骨の健康管理に関心をもつ多くの方々に、ご利用いただければ幸いである。

2016年8月

編者しるす